



B. ラトウール『社会的なものを組み直す』を読む : 経営学の視点から

堀口, 真司

(Citation)

国民経済雑誌, 221(6):61-83

(Issue Date)

2020-06-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0042051>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0042051>



国民経済雑誌

B. ラトゥール

『社会的なものを組み直す』を読む

——経営学の視点から——

堀 口 真 司

国民経済雑誌 第221巻 第6号 抜刷

2020年6月

神戸大学経済経営学会

B. ラトゥール

『社会的なものを組み直す』を読む

——経営学の視点から——

堀 口 真 司^a

本稿では、2019年1月に出版されたブルーノ・ラトゥールの邦訳書『社会的なものを組み直す』の中に収められた、経営学を専攻する学生とその著者ラトゥールとの間で交わされた出口の見えないやり取りを糸口として、経営学に、彼らが提唱する理論（アクターネットワーク理論）を応用するとはどういうことなのかについて考察することを目的とする。そこでは、まず、同書が書かれた背景を整理することによって、ともすれば掴みどころのない彼の視点を、より具体的な制度へと引き寄せながら明示し、その後、そうした視点から経営学を眺めることを試みる。結果として、「経営的なもの」を所与の前提として猛威を振るう経営学の「専門家」の姿が明らかとなる。

キーワード アクターネットワーク理論（ANT）、社会的なもの、
経営的なもの、専門家、経営コンサルタント

1 はじめに

2019年1月、叢書・ユニベルシタスより、ブルーノ（ブリュノ）・ラトゥール著『社会的なものを組み直す』（伊藤嘉高訳）が出版された。ラトゥールは、フランスの著名な哲学者・人類学者であり、現在、彼の近代文明に対する批判的な眼差しは世界中で注目されている。日本でも、彼の著作の邦訳出版の拡大に伴い、徐々に彼の思想の受け入れが進められつつある。しかしながら、近代の相対化を目指す彼の議論は、過去積み上げられてきた諸学の枠組みの再編を迫るものであり、またその受け入れ難さも手伝って、これまであまり積極的には取り上げられてこなかった。中には、「ラトゥールはうさんくさい」「暇つぶしに読むには面白いけど、真面目に扱うものだとは思えない」といった印象を抱く者もいるようであり、彼の議論の全体像に対する理解はそれほど進んではいないようである。同書は、このような

a 神戸大学大学院経営学研究科, horiguchi@port.kobe-u.ac.jp

流れの中、彼の理論的支柱のありかを垣間見ることができる貴重な書籍であり、その副題に「アクターネットワーク理論入門」と置かれていることから窺える通り、彼やその同僚らによって進められてきた、社会学における比較的新しい理論について紹介したものである。

さて、「経営学の視点から」と副題を付した本稿で取り上げたいのは、同書の中ほどに収められている「対話形式の幕間劇」(ラトゥール, 2019, 267-303頁)である。そこでは、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)で経営学を専攻する一人の学生が、アクターネットワーク理論(ANT)を自身の研究に応用しようとして行き詰まり、当時同校に在籍していたラトゥールの部屋を訪れ相談する様子が展開されている。

学生：お邪魔してもよろしいですか。

BL：ええ、どうぞ。オフィシアワーですよ。その椅子にかけてください。

学生：ありがとうございます。

BL：さて……、どうやら、少し悩んでいるようですね。

学生：ええ、そうなんです。今行っている組織論の事例研究にアクターネットワーク理論を適用したいのですが、正直なところ、持て余しています。

BL：持て余すのも無理はありませんよ。ANTは何にも適用できませんからね。

学生：いや、私たちは講義を受けて……ええと……ANTは、最先端の理論であるように思えるのですが。それなのに、役に立たないと？

BL：いや、役に立つでしょうね。ただ、何かに『適用』しない場合に限られますが。

学生：すみません。禅問答でもなさろうとしているのでしょうか。

本稿では、このような学生とラトゥール(BL)の間に繰り広げられた出口の見えないやり取りを糸口として、経営学の研究に彼らの理論を応用するとはどういうことなのかについて考えてみたい。次節では、まずそのやり取りの詳細を示し、どこで意見を違えているのかについて見ていく。続く第3節では、ラトゥールの理論を理解するために、特に同書がどのような経緯で書かれたものであったのかについて整理する。第4節では、うまく書かれたANTの例として、彼自身の手による記述、具体的には実験室と裁判所に関する人類学的調査の比較研究の跡を追う。そして最後に第5節では、第4節で明らかにされたラトゥールの視点から、経営学における「専門家」の役割について考えてみたい。

2 出口の見えない禅問答

BL：いや、申し訳ない。別に気取ったことを言おうとしたわけではないのです。私が言いたかったのは、ANTは何よりも(否定するだけの)消極的な議論であるということです。どんな事態に対しても積極的なことは何も言わないのです。

学生：では、どんな点で、私の役に立つのでしょうか。

BL：一番は、こんなことを言うてくれることですよ。「インフォーマントが1つの文に組織やハードウェアや心理学や政治を混ぜ込んでいるなら、その文をこぎれいな小物入れに分けていくことから始めてはいけません。あなたがすべきことは、インフォーマントが作る要素同士

の結合に目を向けようとする事です。標準的な手続きに従うならば、まったく共訳不可能に見えるであろう要素同士をインフォーマントは結びつけているのです。」以上。その結合がどんなものであるのかについて、ANT が積極的に教えることはできません。

(.....)

学生：でも、エージェント、つまり、私が研究対象にしている企業の人たちは、数多くのネットワークを作っています。他の多くのものとつながっていて、あらゆるところに姿を見せて……。

BL：そう、それが問題なんですよ！ そんなことを言うのに、アクターネットワークは必要ありません。何でも使える社会理論を使えば良いのです。ANT のように突飛な議論を持ち出して、インフォーマントが「ネットワークを作っている」ことを示すだけなら、時間の無駄です。

学生：でも、そうなんですよ。インフォーマントはネットワークを作っているのです。よろしいでしょうか、私はインフォーマントの結びつきをたどってきました。コンピューター・チップ、規格、教育、お金、報酬、国、文化、会社の会議室、あらゆるものです。私は、先生のおっしゃる意味でネットワークを記述してこなかったのでしょうか。

BL：記述してきたとは限らないですね。

(.....)

学生：つまり、アクターが互いにネットワークを作って関係していることを示したからといって、ANT による研究を行っていることにはならないということですか。

BL：そのとおりです。

さて、ここでたびたび登場するアクターネットワーク理論 (ANT) とは、科学社会学者ミシェル・カロンの1980年代に提唱した概念であり、調査対象であるアクター (行為者) の異種混交的なネットワークの結果として現れる連関を記述しようとする方法である。その特徴は、既存の社会学における前提に反してアクターを人間に限定しない点にあり、そこでは各アクターの形態や性質は他のアクターとの関係の効果として生み出されるものとされる (Callon, 1987²⁾)。学生は、自身の研究論文をまとめ上げるに当たり、この ANT という理論を適用することを思い立ち、ラトゥールに直接相談を持ち掛けてきたのである。

学生：(……) 指導教員が求めているのは、私のデータを入れるフレームです。(……) 指導教員がいつも言っているのは、「君にはフレームワークが必要だ」ということです。(……) 私が「フレーム」という言葉で言おうとしているのは、理論、論拠、論点、概念といった、データに意味を与えてくれるものです。どんなときもフレームが必要なのです。

BL：いや必要ありませんよ！ (……) フレームがあることで、絵はきれいにできるようになり、目を引くものになり、価値が高まり、作品の時代がわかるようにもなるでしょうが、絵に何かを付け加えるわけではありませんよね。フレームとは——コンテキストといっても同じですが——、はっきり言えば、データに何の変化ももたらさない要素の集まりであり、そうした要素についての一般的な知識です。私なら、フレームワークには一切、手を出しません。目の前の事態を記述するだけです。

(・・・・・・・・)

学生：私の指導教員はそんなことを求めています！ 私の事例研究が「何らかの役に立つ一般化に至る」ことを求めているのです。「単なる記述」を求めてはいないのです。ですから、私が先生の求めることをすれば、ある事態について上手く記述することになるでしょうが、それでどうなるのですか。やはり、フレームに入れて、類型を見つけて、比較して、説明して、一般化する必要があります。だから、私はパニックを起こし始めているのです。

BL：パニックを起こすべきなのは、アクターが、そうしたことを、絶えず、能動的に、反省的に、執拗にしていない場合だけです。アクターも比較します。類型を作り出します。規格を作ります。機械を普及させるだけでなく、自らの組織やイデオロギー、精神状態を広げるのです。どうして、あなたは知的なことをする人間である一方、アクターは馬鹿の集まりであるかのように振る舞うことになるのですか。アクターが押し広げ、関連づけ、比較し、組織化するためにしていることを、あなたは同じように記述しなければならないのです。別のレイヤーを、「単なる記述」に付け加える必要はありません。記述から説明へと移ろうとしてはいけません。ただ記述を進めてください。(強調点消去)

学生は、フレームワークを求めてラトゥールを尋ねて来たにもかかわらず、ラトゥールはどのようなフレームを利用する必要はないと言い返している。ここが両者のやり取りの間の決定的な対立点である。では、この学生が想定するフレームワークとはどのようなものなのであろうか。

学生：フレームワークを探しにここにやって来たのですが、ANT には、間違いなく、フレームワークを与える力がありません。

BL：与える力がないからよいと思うのですが。あなたのフレームワークは、インフォーマントには見えておらず、あなたの研究によって明らかにされるということですね。

学生：ええ、もちろんです。フレームワークが、私の仕事の付加価値であるはずですが記述ではありません。記述される内容は、誰もがすでに知っていることなのですから。記述ではなく、説明であり、コンテキストであり——調査対象者はコンテキストを見ている暇がありません——、類型です。そうですね。あまりに忙しくて、考えている時間がないのです。私はフレームワークを示すことができるのです。(……) 私が生み出すのは、あらゆる科学と同じ種類の知識ですし、同じようなかたちで物事を説明するものです。つまり、目の前のケースから原因に向かっていくのです。そして、原因がわかれば、その結果を生み出すことができます。何か間違っていますか。平衡状態から遠く離れて動く振り子に何が起きるのかを尋ねるようなものです。ガリレオの法則を知っていれば、もはや、実際の振り子を見る必要すらありません。私は、何が起きるのかが正確にわかります——摂動(外的要因による軌道の乱れ)を除けばですが、もちろん。

BL：「もちろん」ですって！ では、あなたが望んでいるのは、説明してくれるフレームワークとあなたの事例研究の関係が、ガリレオの法則と振り子の落下の関係に等しくなる——摂動は除きますが——ということなのですね。

学生：ええ、そうだと思いますよ。科学的な厳密さは落ちますが。なぜですか。どこか間違っていますか。

BL：いや、結構なことでしょう。でも、それは実現可能ですか。つまり、具体的な振り子が

どう動いたとしても、落体の法則には何の新たな情報も足されないのですよ。落体の法則には、振り子の状態に関するあらゆることが可能的に含まれています。具体的な事例は、哲学者のように言えば、すでにあった「可能的なものの実在化」に過ぎないのです。(強調点消去)

ここで、「可能的なものの実在化」というものが両者を隔てている鍵であることが読み取れる。すなわち、それは観察者のパースペクティブの拡張を志向するものであって、観察される側自らが結びつけているネットワークを記述することを目指す ANT とは、全く相容れないものである。果たして学生は、この違いを理解して、ANT を応用することの意味を理解できるようになるのでしょうか。

学生：それでは、私たちはどこで意見を違えているのでしょうか。(……)

BL：(……) 私には確かなことがひとつあります。研究はおのずとうまくいくものではなく、ほとんどの場合、失敗するということです。二百ページのインタビューや観察などは、まったく何の変化も生み出さないでしょう。有意になるために必要なのは、類い稀な状況を作り出す舞台装置一式です。めったに起こらない出来事です。途方もなく想像力に富んだ実験手順が必要なのです。(……) 自然科学における上手くできた実験とおなじくらい、社会科学における上手く書かれたテキストは稀なのです。

(.....)

学生：でも、上手く書かれた ANT のテキストと下手に書かれた ANT のテキストの違いはどこにあるのですか。

BL：なるほど、それはよい質問です！

学生：ついにですか？

BL：ついにです。お答えしましょう。上手くできた実験室と下手にできた実験室の違いと同じです。それ以上でも、それ以下でもありません。

学生：ええと、そうですね。うん、もう結構です。お相手頂き、ありがとうございました。でも、私は、やっぱり、ANT ではなく、ルーマンのシステム論を基本的なフレームワークとして用いようと思います。(……) よろしいでしょうか。私はただの博士課程の学生ですが、先生は教授です。先生には多くの著作があります。先生は、私にできないことができる立場にあります。私は、指導教員の言うことを聞かなければならないのです。先生のアドバイスをいつまでも守っているわけにはいきません。

BL：それなら、どうして私のところにやってきたのですか。どうして ANT を用いようとするのですか。

学生：実は、この30分のあいだ、同じことを考えていました……。

3 ラトゥールの視座と同書の位置づけ

ラトゥールがその名を高めることになった著作は、スティーブ・ウールガーとの共著『実験室生活—科学的知識の構築—』(Latour and Woolgar, 1979) であった。それはその後、科学人類学と呼ばれる領域の指針となる著作である。ある実験室で科学者が遂行している作業についての記述は、科学の素人である観察者が、あたかも人類学者が異国の見知らぬ地の慣

習を記述するかのように、記述することで成立する。そうして、彼ら科学者の集团的行動の結果として徐々にいくつかの事象が科学的事実として認知され、構成されていく様子が跡付けられることになる。

よく知られているように、この「科学的事実が構成される」という表現が、後のサイエンス・ウォーズにおける批判的となり、ラトゥールもその格好の攻撃目標となった。サイエンス・ウォーズとは、科学者が、科学社会学者の相対主義的、反實在論的傾向に業を煮やし、古典的な實在論や実証主義の再確認を求めながら激しく反論したこと、そしてそれを取り巻く賛否両論の論争のことである（金森，2000，95頁）。

では、科学社会学におけるいったい何が、これほど大きく批判されることになったのだろうか。アメリカでは、1950年代から、マートンを中心とするコロンビア学派において、科学者の組織形態や相互評価や報酬体系などが分析されるようになる。そこで焦点となっていたのは、社会的に制度化された科学者集団の特質、すなわち科学者による知識生産を支える制度であり、その科学知識の妥当性自体は、社会学的な説明の外に置かれていたのである。1960年代に入ると、異なるパラダイムに規定された理論体系が互いに共訳不可能な特性を持つことを問題化した、トマス・クーンの『科学革命の構造』（クーン，1971）が出版され、科学知識の妥当性もまた、時代や地域によって変化するのではないかという相対主義的な見方が広まることとなる。こうして1970年代には、科学活動を取り巻く制度だけでなく、科学知識そのものを社会学の積極的な分析対象にしようとする、いわゆる「科学知識の社会学」が現れる。そこでは、科学知識の自律性が否定され、その真／偽を広く社会的な条件の中へ求めようとする道が開かれることになった。1980年代には、そのような傾向はさらに押し広げられ、「あらゆる知識は社会的に構成される」とする「社会構成主義」が登場することになる。それは、科学論にとどまらず技術論へも拡張され、ある知識が真／偽とされる原因にも、またある技術が有効／無効とされる原因にも、社会的要素が含まれていることを様々な事例に基づいて描き出し、科学技術が理性の自律的な運動ではなく、社会的な制約に応じて変容³⁾しうることを示そうとしてきた。

さて、サイエンス・ウォーズでは、この相対主義的な見方が批判されたわけであるが、その背景として、1970年代から80年代のアメリカで流行していたポストモダニズムに注目することが重要である。ポストモダニズムとは、当時、哲学や社会学、フェミニズムなどをはじめ、建築や芸術に至るまで、多様な領域で広まった知的流行である。その魅力は、例えばハイカルチャーとローカルチャーの区別を撤廃して、大衆文化に注目するような、革新的な点にあった。そこでは、流動性や不安定性が強調され、過去との非連続性、現実社会の無意味さといった感覚が扇動され、まさに当時の文化的、政治的な潮流と適合するものであった。そうした中、当時アメリカではヨーロッパの多くのポストモダニズムに関連する著作が読ま

れたのである。しかしながら、その魅力にもかかわらず、何人かのアメリカ人は当初から一種の居心地の悪さを感じていたこともまた事実である。それは、流動性や不安定性を煽り立てるあまり、統合を拒否し社会の断片化を招く傾向があったからである。したがって、サイエンス・ウォーズとは、このような嫌悪感を抱く科学者が、当時のポストモダン流行に乗って広まりつつあった科学社会学に対して、真正面から取った批判行動であったとも言えるだろう。⁴⁾

その主張の骨格はおおよそ次のようなものであった。近年のモダニズムとポストモダニズムの対立は激しさを増し、ついにはそれが科学との関わりの中で論じられるようになっていく。こうした状況の下、科学者らは、アメリカの人文系領域の知的水準が衰退してきたのではないかと嘆き始めつつある。彼らによれば、本来、科学社会学が問うべきなのは、例えば企業や政府の資金投入が科学的実践にどのような影響を与えたのかといった問題であるが、科学社会学者らの多くはそのようなことを問うことなく、対象の実在性といった議論に終始している。しかし、彼らが何と言おうと実在世界は存在するのであって、単なる社会的構築物などではない。その中心的人物であるアラン・ソーカルはジャン・ブリクモンとともに『知の欺瞞』という本を書き、デリダ、フーコー、ラカン、リオタールといった高名なフランス現代思想家たちを名指しで取り上げ、彼らのテキストの中に使われていた自然科学由来の概念が、間違った使われ方をしていることを一つ一つ指摘していったのであった（ソーカル＝ブリクモン、2012）。

このソーカルが取った行動は大きな反響を呼び、やがてポストモダニズムの流行に乗った科学社会学は、その勢いを失い始めることになる。しかし、ここで見落とすことのできない問題は、科学者らによるこのような批判が、それまで科学論において積み上げられてきた知見を何ら消化しえていなかった点である。そのいわば戦記を遺している金森（2000）が指摘していたように、「それが単なるカルチュラル・スタディーズ叩き、ポストモダニズム叩きで終決してしまうのであれば、多くの問題は手つかずのまま残されることになる」（102頁）。実は、このようなサイエンス・ウォーズを巡る状況を受け、既存の科学社会学の何が問題であったのかを整理する目的で出版されたのが、同書『社会的なものを組み直す』であった。ラトゥールは其中で、サイエンス・ウォーズに対する率直な印象を次のように表現している。

「いわゆる『サイエンス・ウォーズ』の騒動から私に言えることがあるとすれば、おそらくは、そうした一部の科学者たちはこう結論したということだ——科学の潔白なる純粋性は、間違っても、ただの社会学者の黒く脂ぎった指で汚されるべきではない。こうした科学者たちが私たちとの出会いから何も学ばなかったならば、あまりに残念なことであり、私たちにできることはあまりない。」（ラトゥール、2019、187頁）

その上で、それは同時に彼にとって重要なサインであったとも付け加えている。なぜなら、

何らかの社会的説明がなされるときにはいつでも実に狡猾なことが続いていたからであった。彼によれば、それが起こるのは、複雑で、特異的な事象が、単純で、汎用的な言葉に置き換えられ、後者が前者を説明できるとされるときである。すなわち、「説明される側のものを説明する側のもので置き換えることで終わってしまう（強調点ママ）」（ラトゥール，2019，188頁）のである。

それに対して、同書のねらいは、そこで所与とされている「社会的なもの」を、素材や原因と見なせない理由を示すことにあり、さらには、他の何かしらの事態に対して「社会的説明」を行おうとすることに異を唱えることにあると言う。すなわち、一般に社会学が応用されるとき、言語社会学であれ、経済社会学であれ、経営社会学であれ、そこでは「社会的なもの」が、言語学、経済学、経営学などの背景として、つまりそこに何らかの光を当てることのできる所与の前提として受け止められているのに対して、同書でラトゥールが提唱している立場は、反対に、そのような「社会的なまとまり」が、言語学や、経済学や、経営学などによって作り出される連関（つながり）の結果として現れうるものとして捉えられている。そうして、社会学を、「社会的なものの科学」ではなく、「連関をたどること」と定義し直すことで、本来の社会科学という直観に忠実であり続けるような方向性が模索されているのである。

したがって、同書が想定している主な読者は、これまで社会的説明を繰り返してきた社会学者に向けられていたものと言えるだろう。同書で繰り返されているように、そのポイントは、社会学者がいかに既存の「社会的なもの」を所与の前提とすることなく、連関の記述に徹することができるのか、という点にある。彼自身、「私が求めているのは道理をわきまえることではない！ここで行っているのは、最後まで突き詰めた場合にのみ元が取れるような思考実験である」（395頁）と述べているように、その前提を持ち出すことによって説明を加えようとすることに満足する傾向を問題化したのである。したがって、まず求められることは、その所与の前提となる「社会的なもの」の影響力の大きさに自覚的になることであろう。実際、彼が過去に行った実験室や裁判所に関する人類学的調査においても同様のスタンスが採用されており、「科学的なもの」や「法的なもの」がどのような要素によって作られているのかの詳細に記述されている。そこでは、多様な要素の結果として成立している「科学的なもの」「法的なもの」に焦点を当てることによって、物事を「科学的に」説明したり、「法的に」説明したりするアプローチを回避することが目指されているのである。次節では、彼自身が行っていた、「科学的なもの」と「法的なもの」を成立させているネットワークについての比較研究の跡を追うことによって、うまく書かれた ANT とはどのようなものなのかという、先ほどの学生の疑問に答えてみることにしたい。

4 科学的なものと法的なものを成立させている鎖

実験室と裁判所での参与観察を実施したラトゥールは、両者の実践を比較するに当たり、まずは、それらの実践を成立させている共通の特徴を記述するところから議論を始めている。私たちもよく知るように、事実の固さと法の厳格さは、私たちが疑いもなく服従している二種類の堅実性である。両実践とも、ある種の正確性に基づいて、偏見のないアプローチの美徳を強調している。つまり、どちらの実践においても深遠な言葉が選ばれ、慎重に練磨された様式で推論が行われている。

そこでラトゥールがまず注目するのは、両者に共通する起源、すなわち、テキストの操作である。それは、テキストをその重要性に基づいて階層化しながら蓄積されてきたものであり、どちらの実務家も、それによって外部の世界を閉じられた空間の中へと置き換えてきた。科学者と法律家にとって、一度それらが偉大な書物へと変換されれば、その世界について自信を持って話すことができるようになる。例えば、ある判決が著名な『判例集』の中に掲載されるとき、それは日々処理されている軽微な事件に対する判断よりも大きな敬意が払われていることを意味する。同じように、*Nature* や *Science* に掲載された論文が、ウェブサイト上で閲覧可能なプロシーディングスよりも大きな愛着を持たれている。このように、両者とも、集団的に保証されたこれらの文書と、いまだに議論の余地のある文書とを、厳密に区別している。そこでは、あらゆることがすでに書かれてきた一方で、それでも未だに何も書き尽くされておらず、そのため繰り返し、集団的に、新たな解釈のための努力が再開されているのである（ラトゥール、2017、300-1 頁）。

しかしながら、実際には両者は、非常に異なった縮減の様式である。一方の科学においては、例えば *Nature* に公表されたテキストから、最新のコンピュータによって解析処理された小さな信号を通じて、そのテキストが描く対象へと至るまでの道筋を行き来することが可能であるのに対して、他方の法においては、事件を契機に法テキストはますます豊かになるが、それによって事件そのものについての新しい知識が得られることはない。法的な縮減では、できる限り迅速に異論のない事実の領域を構成することが目指され（ただしそれは、その事実を争う反対意見が提出されていないということの意味する）、彼らが判断を言い渡すために必要となる事実がファイルの中に閉じられることになる。科学的な縮減でも、世界の複雑性が論文やテキストへと置き換えられるが、それが確立しているアプローチは全く異なるものである。なぜなら、一度ある者が一つの論文、一つのテキストを手に入れば、常にその者のステップを辿り直すことができるような双方向の道筋が確保されているからである。しかしながら法では、たとえ以前の判例からの類推やその適用が行われるとしても、それは常に対象との行き来ができるような道筋を確保するものではない。ファイルは確かにある結

びつきを確立しているが、それが閉じられたときには、彼がもはや事実からそれ以上何も学ぶ必要が無いことを意味している（ラトゥール、2017、309-10頁）。つまり、法には、そのような意味での情報のカスケードを期待することはできないのである。確かに、そこにはファイルの中に包まれた小さな情報の重ね合わせが存在していると言えるかもしれない。しかしながら、たいていの場合それらはとても短く、少し進めばすぐに中断されており、科学に見られるような特別な種類の確実性を提供することはできなくなっている。

このような比較観察を経てラトゥールが辿り着くのが、次のような結論である。すなわち、裁判所では、あらゆる努力ができる限り疑いを維持することに注がれているが、判決に到達すれば、それを限りに疑いのないものとなる。対照的に、実験室では、あらゆる努力が確実性に到達するために注がれるが、最終的には、他者や同僚へ、また将来の科学者や科学そのもののダイナミクスへ、言われていることの真価を決定する行為が委ねられることになる。言い換えれば、法廷の最も本質的な性質とは、延期したり、その義務を自分より適任で上級の誰かに託したりすることなく、その場で判決を下すという絶対的な義務であるのに対して、科学者は、その真偽の判断を後代へと先送りすることになる（ラトゥール、2017、297-8頁）。

ここでラトゥールは、このような「科学的なもの」と「法的なもの」を構成しているそれぞれのネットワークを、「参照の鎖」と「義務の鎖」と呼称し、その要素ごとの違いを表1のように整理して示している。常識的には、両実践ともに、近代における真実を生産するための装置のように思われているが、表1からも窺える通り、その特徴は大きく異なることがわかる。例えば、同じ情報という概念も、一方の科学では「変換すること」を意味するのに対して、他方の法ではあくまでも「形式に従うこと」が意味されている。また、その内容が疑わしいときの対応策も両者の間で大きく異なり、科学では「実験室を離れてフィールドへと戻る」ことが求められるのに対して、法では「より多くの文書に尋ねる」が、それはあくまでも「ファイルの範囲内」で行われることになる。

さて、ここで現代社会を見渡せば、このような単純な比較研究を行うことがいかに難しくなっているかということに気付かされることだろう。なぜなら、科学や法についての一般的な説明が、このような互いの活動の特徴を様々な点で混同しているように見えるからである。ラトゥールによれば、こうした混同が最も明白に現れるのは、それぞれの実務家が「専門家」と呼ばれるときであると言う。例えば、科学者が「専門家」として捉えられるとき、自身の役割から意識を逸らされた科学者に、あたかも裁判官のような役割を背負わせ、事実という議論の余地のない権威の中に自らの証言を「既決事項」として提示するかのような役割を引き受けさせている。しかしながら、本来科学者には法における「既決事項」とされるような権威はどこにもなかったはずであると指摘する。なぜなら、もしある科学論争について最新の報告が確かなものであるらしいという主張に出くわしたとすれば、そしてもし彼女自

表 1

<参照の鎖>	<義務の鎖>
・執筆業務が暗示的である ・銘刻の資源が異質的である（事物から形式へ） ・非人間による銘刻 ・情報＝変換すること ・変換のカスケード。それが遠く離れた現象へアクセス可能な参照をもたらす ・事実やその理論を把握するために常識が捨てられる ・疑わしいときは、実験室を離れてフィールドへ戻る ・レビューに限界はない ・事実と理論はともに進化する ・地図と領域の間の繋がりは、不断の発見を通じて作られる ・ある一例をあるタイプの中に包含することによる分類学 ・データから形式への双方向的運動 ・知識体系の反復と拡張 ・新しい情報の制作 ・研究者の名祖（なおや） ・情報の運動によって追うことのできるネットワーク ・計算の中心と縮尺モデル	・執筆業務が明示的である ・銘刻の資源が同質的である（紙から紙へ） ・人間による銘刻 ・情報＝形式に従うこと ・細切れの情報。ただファイルの事実部分をチェックするのみ ・申立ての現実性を保つために、常に常識が保持される ・疑わしいときは、より多くの文書に尋ねるが、ファイルの範囲内に留まる ・レビューのプロセスは制限されるべきである ・事実が安定化されてはじめて、本当の法的作業が始まる ・法と事件の間の繋がりは、「条文zの意味ではxはyである」によって作られる ・その本質を定義することなしに、特徴とタイプを結びつけることによる分類学 ・一方向のみ ・法体系のホメオスタシス ・確立された結びつきの安定性 ・申立人の名祖（なおや） ・「事由（*）」の運動によって追うことのできるネットワーク ・アーカイブは裁判官の記憶によって具体化される

（出典：ラトゥール，2017，315頁）

身がその確からしさに同意したとするなら、彼女のとるべき行動はただその上に新しい事実を付け加えるために新たな実験を構築することであるからである。すなわち、科学者には終わりのない議論の更新運動が認められているのみであり、論争を終決させる権威のようなものを彼女の中に認めることは誤りである。曰く、

「一般的に科学者に帰せられている性質の多くは、実は、公平無私という壊れやすいエートスを作り上げるために法律家によって発明された、ミクロな手続きから導かれたものである。ある事件の結果についての無関心、精神と語られる対象との間に確立された隔たり、判断の冷静さおよび厳密さ——要するに、私たちが客観性に連想づけるあらゆるもの——は、本来は、実験室や計算の世界ではなく、裁判官側に帰属している。あるいはむしろ私たちは、解決策に対する無関心や平静さというムードの基礎となる「客観性」（“objectivité”）を、対象性（objec-

tité)と表現されるものから区別すべきなのかもしれない。対象性とは、科学者が、実験を通じて現象が通過する試行に、自身の命運や発言を拘束するという意味での試練のことである。(……)(それに対して)法的客観性についての奇妙な点は、それが全く文字通り無対象的であること、つまりある精神状態やある身体的性向を作り出すことによって、完全に維持されていること(にある)」(ラトゥール, 2017, 317-8頁)。

こうした観点からすれば、科学者は正確な対象について不明瞭な言葉で話し、法律家ははっきりしない対象について正確な言葉で話すものと言えるだろう。したがって、もし人々が、科学者の客観性を賞賛してきたとするなら、それは彼らが裁判官のような役割を果たすべきことを、暗に意味しているものと言えるだろう。そしてもし人々が裁判官のもろさについて不平をもらすなら、それは彼らが科学者と同じような種類の対象を掲げるべきことを、無意識のうちに期待しているものと言えるだろう。

以上のような議論を踏まえるなら、もし「専門家」としての科学者に決定するかしんかいという権威が実際上与えられてきたのだとすれば、これは大きな有害であると言える。なぜなら、そもそも裁判官が「最終決定的な言葉(判決)を述べる」と呼んでいるものは、「専門家」の権威と考えられているものとは、全く異なるものであるからである。その中に含まれていることは、常に、利用しうる限りの抗議チャンネルが消耗されたという事実であり、この特殊な消耗以外には、何ら崇高な頂きへと到達することはないからである。それは極めて単純に、私たちがその議論に消耗させられたことを意味しており、そこで議論を終えたことを意味している。したがって、何よりも大事なことは、誤って委託されてきた最終決定的な言葉(判決)を宣告する権限を科学者から取り除き、その上で「参照の鎖」の構築という本来の運動を再開させることである。

さて、ここまで、一見捉えどころがないようにも思われる彼の議論を、具体的な制度に引き寄せながら上のように整理してきたが、その問題意識を一言で表現するなら、次のように言い直すことができるだろう。すなわち、一方で、あらゆる操作に抵抗する触知しがたい現実と対峙しているために、私たちの願望に沿うようにねじ曲げることのできない科学と、他方で、閉鎖的な尋問の中で言葉だけで達成される合意によって構成されているために、最終決定的な言葉を述べる権限が与えられている限りどんなことでも言うことができる法とを混同し、あたかも両者の機能を併せ持つかのような存在者を打ち立てることは、全くの誤りであると。

実は、先に見た『社会的なものを組み直す』においても、何らかの社会的説明がなされるときにしばしば起こる奇妙な置き換えの原因を探る過程で、同様の問題意識、つまり「専門家」としての活躍を求める社会学者の姿が提示されていた。

「社会学は、科学主義の絶頂にあった自然科学を模倣し、社会問題の解決を求める喫緊の要請にこたえるために、適正な政治的手続きをショートカットしようとした。(……)社会学者が

そんなことをしたのは、(……)『社会的なもの』、とりわけ社会を用いることで、共通世界を定義するための解決策をほとんど手にしたと考えていただけた。社会学者が望んでいたのは、その時代の政治問題について発言したり、近代化の急速な進展に介入したり、少なくとも自らの科学の諸法則を社会工学に適用することであった。」(ラトゥール, 2019, 472-3 頁)

要約すると、ラトゥールの意図は、このような「科学的なもの」や「法的なもの」、そして「社会的なもの」を持ち出すことによって「近代の枠組み」を指定し、その枠組みを所与のものとして猛威を振るおうとする者(自然科学者であれ、社会学者であれ)を明るみに出すことであった。こうした観点から改めて経営学を眺めるなら、そこには、「経営的なもの」を所与の前提としながら猛威を振るう、新しい「専門家」の姿が浮かび上がる。次節では、最後に、この点に注目してみよう。

5 「経営的なもの」の生成とその「専門家」

ここで、本来であれば、「参照の鎖」や「義務の鎖」に対応する、経営学における鎖の特徴を明らかにし、それらとの比較をわかりやすい形で提示することが期待されることだろう。しかし、もう一度、本稿冒頭の両者の間のやり取りを見直してほしい。

BL: (……) あなたのフレームワークは、インフォーマントには見えておらず、あなたの研究によって明らかにされるということですね。

学生: ええ、もちろんです。フレームワークが、私の仕事の付加価値であるはずですが、記述ではありません。記述される内容は、誰もがすでに知っていることなので。記述ではなく、説明であり、コンテキストであり——調査対象者はコンテキストを見ている暇がありません——、類型です。そうですね。あまりに忙しくて、考えている時間がないのです。

学生は、調査対象者が、自分たちが置かれている状況を理解するための助けとなるような説明を提示することが重要な目標であると述べながら、続けてすぐに、次のように付け加えていた。

学生: (……) 私が生み出すのは、あらゆる科学と同じ種類の知識ですし、同じようなかたちで物事を説明するものです。つまり、目の前のケースから原因に向かっていくのです。そして、原因がわかれば、その結果を生み出すことができます。何か間違っていますか。(……)

つまり、自らの説明が科学における説明と同じ種類のものであることを強調している。したがって、一方では、調査対象者である実務家に対して有用な説明が目指され、そして他方では、それが科学としての固さを備えたような理論となることが目指されているのである。ここで、この学生の主張に見られるような、「科学法則」としての性質だけでなく、そこに「実務への役立ち」をも志向しようとするのは、何も彼個人の特異な発想なのではなく、実は、経営学という領域に広く行き渡った傾向である点に注目することが重要である。

一般に、経営学の主要ジャーナルに掲載されている研究は、その大半が何らかの統計分析を用いた定量的な研究であり、例えばフィールドワークに基づく定性的な研究は、その1割

にも満たないと言われている⁵⁾。周知の通りその原因は、統計手法を用いた研究は、その研究方法がよくマニュアル化されているのに対して、定性的な研究にはそのようなものが少なく、ジャーナルに掲載されるまでの壁が高いからである⁶⁾。しかし、このような状況にありながらも、この領域に所属する者の研究関心が短絡的に定量的研究へと向かっているのかと云えば、必ずしもそうではない。例えば、経営学におけるトップジャーナルとして位置づけられている、*Academy of Management Journal* (AMJ) が2004年に実施したそのボードメンバーに対する意識調査では、「AMJ 論文のどのような貢献を重視しているか」という質問に対し、42%が「経験的な貢献」、41%が「理論的な貢献」を重視するとした一方、17%が「実務への適合性」と回答しており、一定の割合の者が何らかの形で実務との関わりを意識していることが窺える (Rynes, 2005, p.10)。また、「AMJ に掲載された論文のうち最も興味深い論文はどれか」という問いかけに対し、定性的な方法に基づく研究を選んだ者の割合が、同ジャーナルの論文全体に占める定性的研究の実際の掲載割合よりもはるかに多かったことが示されており (Rynes, 2005, p.13)、ここからも、掲載された論文数に表れている傾向とは裏腹に、彼らの定性的研究に対する高い関心を窺い知ることができる⁷⁾。さらに、「AMJ が今後3年うちに取るべき最も重要な変革は何か」という質問に対する回答として最も多かったのは、「より革新的でありながらも形式的ではない研究を受理すること」というものであり⁸⁾、ボードメンバーらは、過度の形式主義を回避し、より革新的で興味深い研究を推進しようとしていることが読み取れる⁹⁾。

実際に、このような傾向は現在も続いており、例えば2018年の AMJ 編集者からの提言の中でも、「私たちはより一層入り組んだ問題に直面しており、研究者らは、これらの複雑な挑戦を紐解くために、ますます定性的研究を採用するようになりつつある」と指摘した上で、2017年には、AMJ へ投稿された全論文のうち定性的研究が20%にも及ぶという、過去最高の割合に到達していたことを示している (Bansal et al., 2018, p.1189)。すなわち、経営学では、実務における問題の複雑さに直面しながら、いかに研究として厳密な (リゴラスな) 定性的研究を推進していくことができるのか模索されており、まさに先ほどの学生の主張と同じようなスタンスに立っていることがわかるだろう¹⁰⁾。

では、経営学におけるこのような傾向は、いったいどこから来るのだろうか。それは、かつて AMJ において、「科学的厳密さと目的適合性の両立」という問題に真正面から取り組んでいたフェルミューレンによる次の一文に端的に現れているように思われる。

「せいぜいのところ他の研究者仲間には読まれたいようなジャーナル論文を公表したいという思いで経営学を志す者はほとんどいない。むしろ、この領域を志願する者は、現実の組織の世界を変革しようという、真に実務に適合的な知識を獲得し開発するという思いによって、より一層鼓舞されている。」 (Vermeulen, 2005, pp. 980-1)

要するに、経営学では、表面的には、科学的にリゴラスな研究を確保することが目指され、事実量産されているが、内面的には、いかにその成果が実務に適合的であるか、つまり実務家にとって有用な知識となり得るか、が志向されているのである。言い換えれば、この一見相容れないようにも思える「科学的であること」と「役に立つこと」を両立させることによって、経営学というディシプリンが形成されているとも言えるだろう。そして、そうした中で実現されているものこそ、科学的に保証された知識体系の下で意思決定を行い得る者を育成することであり、それはまさに、先ほどラトゥールが述べていたような、科学の対象性を借りながら客観的な判断を下そうとする「専門家」であると言えるだろう。

ここで、現代社会を見渡すならば、このような性質を備えた経営学における「専門家」と呼ぶにふさわしい存在は、経営学を真の科学へとすることを夢見ながら日々定量的研究の量産に励む者たちでないことは明らかである。また、ましてや、業績の量産の観点からは明らかに不利であるにもかかわらず、定量と定性という伝統的な区別にこだわりながら、定性的方法に基づく研究に励む数少ない研究者であるはずもない（彼らはただ、自らの置かれた不利な立場を嘆き、定性的研究をいかに「科学的な」研究として記述することができるのかと苦心している特異な集団であるに過ぎない）。両者は、結局のところ、ともに科学者になることを憧れる存在であり、これまで科学論で蓄積されてきた議論の新たな対象者であるに過ぎない。¹¹⁾ 本稿で想定する、「経営的なもの」を運ぶ経営学の「専門家」とは、むしろ、多かれ少なかれ彼らが執筆する論文の影響を受けたカリキュラムを通過することによって与えられる学位の取得を目指す者の中にいる。それは、最も新しい専門職業家とも称される、「経営コンサルタント」である。

1990年代の終わり頃までには、主要なビジネススクールにおいて学位を取得する目的は、経営コンサルタント会社や投資銀行で採用されるための通過点として考えられるようになっていた。すなわち、MBA という学位は、これらの新しい専門職業家が、企業の経営戦略やファイナンス構造について助言を提供するための資格として見なされるようになっていたのである。いわば彼らは、日々大学教員らによってその自然な対象性が保証されている世界観の下で、実務家の意思決定への助言を担うことが一般に認められているかのような存在である。

専門職業家としての経営コンサルタントの生成は、グラス・スティーガル法（1933年銀行法）がアメリカ議会を通過したことの結果であると言われている。商業銀行と投資銀行の分離を規定した同銀行法の以前には、会計士やエンジニアといった実務家によって提供されていた助言業務は、おおよそ商業銀行の監視下にあった。しかし同銀行法の施行以降、商業銀行は、証券の引受や株式の仲買から手を引くことを余儀なくされ、そのような助言業務は規制の外に置かれるようになったのである。同時に、1933年の証券法は、全ての資金調達はその

れに先立ってデューディリジェンス（適正な資産評価手続き）を受けることを求めたが、やがてそれが、経営コンサルタントという業務についての共通認識を生み出す土壌となる。さらに SEC は、会計士の専門職業家としての「独立性」を維持し、潜在的な利害の対立を回避するために、大手会計事務所が、企業監査業務を中心にその専門職実務を再編することを要求したのである。例えば、アーサーアンダーセンのような、よく知られた会計事務所は、それ以前は「産業と金融の調査」という曖昧な領域で活動していたが、それが監査業務へと制限されるようになったのである。このように、同銀行法や SEC が、ライバルとなる専門職業家集団（法律家、エンジニア、会計士のような）の活動範囲を明確に規定したことによってコンサルタント行為を行うことが制限され、その結果、ブーズ・アレン・ハミルトン社やマッキンゼー社といった独立の経営コンサルタントの成長を、急速に促進することになったのである（McKenna, 2010, p. 17）。

ではなぜ、トップビジネススクールの卒業生たちが、経営コンサルタントの道を選ぶようになったのであろうか。それは、当時、経営コンサルタントという業務を専門職業化することに尽力した、マッキンゼー社のパワー（Marvin Bower）による貢献が大きかったと言われている。1950年代までは、コンサルタントを発掘したり、スタッフを昇進したりするプロセスは常に難しい作業であった。なぜなら、そこには定まった採用と昇進のためのルートが無かったからである。¹²⁾1940年代には、マッキンゼー社では、新しいスタッフの採用はアドホックに行われていたが、やがてパワーは、主要な企業法律顧問会社を模倣して、新しいコンサルタントたちの採用、選抜、昇進のプロセスを制度化しようとしたのである（McKenna, 2010, p. 206）。

パワーは、ニューヨークの大手法律会社クラバス・スウェイン・アンド・ムーア（Cravath, Swaine, & Moore）のポール・クラバス（Paul Carvath）によって開発された仕組みを見習った。その「クラバス・システム」と呼ばれた手法は、それまでの伝統的な法律徒弟制度（legal apprenticeship）とは異なり、エリートロースクールの一握りのトップ卒業生の中から候補者を選抜し、その若い法律家たちを固定の給料で訓練するものであった。パワーは、1962年のハーバードビジネススクール（HBS）での学生向けガイダンスで、次のような演説を行ったと言われている。「経営コンサルタント会社——新しい専門職業家のひとつとして現在急速に現れつつある——は、ビジネス界や、内閣や政府機関、そして他の組織が、彼らの主な経営問題を解決するための助言を行う者である」（McKenna, 2010, p. 5 より引用）。やがて HBS の MBA 生らは、このパワーが提示したキャリアプランに大きな魅力を見出すようになる。HBS のケースメソッドという教育システムと、現実世界の企業問題を解決するスキルとの間の類似性が強調されるようになったのは、こうした背景の下であった（McKenna, 2010, p. 207）。

ケースメソッドとは、学生に自分たちがケースの中の会社を率いる経営者であると想像させ、同社が採用すべき方向性を考案し、クラスの他の参加者を説得することを求めるような教育法である。そこでは学生に対して、首尾よく設定されたケースが提供され、その中で彼らは、スプレッドシート、ディシジョンツリー、金融モデル、その他高度な統計手法を適用することによって、どのような方向性を採るべきかについて互いに議論させられる。よく知られているように、この教育法は、他の様々なビジネススクールでも採用され、経営学教育の代名詞とも言えるほど、広まっている教育法である。

こうして、MBAの学位を取得することが、経営コンサルタントとして採用されるための、事実上の資格として考えられるようになったのである。つまり、彼らは、MBAを、大企業で実際に経営を行っている実務家との差別化を図るための、最も効果的な方法と見なし始めたのである。こうしたパワーらの尽力により、HBSからマッキンゼー社へのコンスタントな流れが作り出され、1967年までには、同社の全コンサルタント358人のうち、その3分の1以上、つまり121名が、HBSのMBA取得者となったとされている（McKenna, 2010, pp. 207-8）。

こうして現在では、大学教員らによって手際よく準備された教材を通じて、自然な経済活動、自然な経営環境に関する諸対象を学び、卒業後には、第三者的な立場から（つまり、クライアント企業からは独立した存在者としての位置を確保しながら）、意思決定（判断）を言い渡すという猛威を振るっているのである。¹³⁾先のやり取りの途中、ラトゥールが、「どうして、あなたは知的なことをする人間である一方、アクターは馬鹿の集まりであるかのように振る舞うことになるのですか。」（287頁）と述べていたが、これはまさに現在の経営学の「専門家」に対して向けられた言葉として受け取ることができるだろう。

さて、このように述べてくれば、ここでの議論は、単に2008年の金融危機後の世界における「MBA再考論」（rethinking of the MBA）の繰り返しではないかと思われるかもしれない。そこでは、近年の企業経営が、過度に高度な数学的モデルに依存するようになっており、適切な意思決定が果たせなくなっていると批判され、その原因が、アメリカのビジネススクールのカリキュラムの中に求められていた。¹⁴⁾分析志向型のケースメソッドという教育法が、よりフィールドに根差した学習法によって補完されなければならない、というのがそこでの主な論点であった。例えば、ダターらは、多くのトップビジネススクールのディーンやビジネスエグゼクティブらに対するインタビュー調査を実施し、彼らの多くが、よりフィールドに根差した教育法の必要性に合意していることを明らかにしていた（Datar et al, 2010）。

また、著名な経営学者ヘンリー・ミンツバーグも、「MBA再考論」というタイトルの下でインタビューを受け、「MBA学位（特にトップクラスのビジネススクールからの学位）が、卒業生に対して不当な自信を提供することになっているのではないか？」という問いに

対して、「その通りだ」と答えていた。そして、その理由を次のように述べている。

「私は、ビジネススクールがしていることは、分析的な世界観を助長することだと思います。それは数値的な世界観へとつながり、非常に複雑な問題をとても単純な物事へと還元するものです。したがって、ボトムラインの数値は、それらを何らかの処理可能なものへと転換してくれるために、分析に深く没頭している人々にとっては非常に便利なのです。しかし、世界には微妙な差異があり、それは高度に複雑です。そのため、私たちは悪りつかれたように分析的な人々を好ましく思わないのです。¹⁵⁾」

したがって、ビジネススクールでの教育は、彼らに誤った自信を提供することになり、効果があるというよりむしろ害となっているという見解へとつながることになる。確かに、ミンツバーグが「経営は専門職でもなければ、科学でもありません。あなたは、外科や工学を学ぶときと同じようには、経営を学ぶことはできないのです。経営とは実践なのです」と述べるとき、上で見てきたラトゥールの見解と相通ずるところがあるようにも思える。しかしながら、その意図は、「一般的な経営などというものはありません。あるのはただ、それぞれが特殊な状況下に置かれた経営なのです」というものであり、それゆえ、「経営を実践するためには、コンテキストを理解し、その産業を理解し、その組織を理解し、その文化を理解しなければならぬのです」という、いわば経営の現場への回帰といった主張へとつながることになる。¹⁶⁾すなわち、その背後には、経営の判断を、コンサルタントから元来の経営者へと返還しようとする意図があるとも言えるだろう。

しかしながら、本稿を通じて見てきた通り、判断欲を満たすために裁判服を借用し「専門家」となった科学者に対するラトゥールの批判的眼差しからすれば、彼らが「経営的なもの」と呼ぶものの背後では誰も客観的な判断など行い得ておらず、ただ多様なネットワークが偶然的に形成されているに過ぎないことが思い出されることになる。つまり、(間違っても)経営学の「専門家」に、より複雑な状況を理解した上での判断を要求するものではないのである(そもそも閉じられたファイルの世界を構築しない限り、客観的な判断は達成することはできない。そのため、現実の世界の複雑さを追求することは、ますます判断からは遠ざかることを意味することになる。しかし、いったい誰が、そのファイルを構成し、彼らに判断を委ねることに合意してきたのか?)。

5 お わ り に

「社会的なものを組み直す」ことの意図は、近代における共有された「社会」の定義に沿う事例を集めることなく、本来科学という営みに期待されてきた役割、つまり連関の記述に徹した観察者としての役割を、社会学者にも思い出させることにある。彼らには終わりではなく、ただ永遠にそのような連関の記述を繰り返す役割が担わされているだけである。本稿では、そのような本来の役割を忘れ、「専門家」として活躍することを望む人々、自らの

判断を「既決事項」であるかのように振りかざす人々（自然科学者であれ社会科学者であれ）を問題化しようとするラトゥールの視点に焦点を当てながら、その経営学への応用可能性について見てきた。そこで見えてきたものは、最も新しい専門職業家と謳われ、20世紀を通じてその影響力を急速に拡大させてきた、経営学の「専門家」の姿である。彼らは、ビジネススクールでの学位を登竜門としてそのキャリアを形成し、やがてそのカリキュラムを通じて育まれた「経営的なもの」を所与の前提として、自らの判断を言い渡すことの正当性に、何ら疑いを持たない人々から成る集団である。

かつて HBS における重要な教育法としてケースメソッドを創設したワランス・ドンハム (Wallance Donham) が、あてどなく移り行くビジネスというものを主題とする書物をまとめたとき、その序文を依頼された哲学者アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドは、次のような言葉を寄せていた。

「社会学、政治哲学、政治経済学、そして巨大ビジネスの実践における伝統的な教義は、安定して変化しない社会システムという暗黙の前提によって大きく歪められ、損なわれてきた。そうした前提に立つ限り、単純化された人間の性質 (human nature) の上に、比較的容易に推論を位置づけることができる。(……) 私たち皆が思い出すことができるように、その典型例が、経済人 (economic man) である。(……) それはとても美しくシンプルで、また入念に創り込まれたもの (労作) であることは、明らかな真実である。(……) しかし、私たちが、重要な点で変化しつつある (現実の) 社会システムと関わる時、この人間関係に関する単純化された概念化は、厳密な留保が求められることになる。」(Whitehead, 1931, xx-xxi)

ここでホワイトヘッドが指摘しようとしていた「人工的単純化 (artificial simplification)」の典型例は、彼自身も触れている通り、「経済人」「需要と供給」「競争」といった経済学上の概念構成体であることは明らかであるが、ただし彼は決して単純な経済学を批判して、複雑な経営学を擁護しようとしていたのではなく、「多様な人間社会の複雑な流れを理解する哲学的な力」を求めているのである。それは、

「現代のビジネスにおけるメンタリティは、科学や社会学など、多くの学問分野からの要素が求められる。しかし、重要な事実が残っている。それは適切な (relevant) な知識の詳細は決して予見できないことである。」(Whitehead, 1931, xxvi)

という彼の言葉の中に、はっきりと現れている。このように、ホワイトヘッドによって、安定的な社会ではなく、移り行く社会というものが強調されていたことは、そこでの「社会」というものが、社会的なものの集合ではなく、時間的にも空間的にも持続する混成的な存在の束として捉えられていたからである。それはまさにラトゥールが、同書の中でホワイトヘッドに寄せて捉えようとしていた連関の結果として現れる「社会」に込めた意味合いと同じであろう (ラトゥール, 2019, 417頁)。こうした観点からすれば、哲学者ホワイトヘッドがビジネススクールの創設に際して寄せていた言葉に、改めて耳を傾ける時であるように思

われる。

注

- 1) 久保 (2019)『ブルーノ・ラトゥールの取説』冒頭の挿話より。ただし、「私はラトゥールをある程度は真面目に扱わざるをえなくなってきた。同時に、ラトゥールや ANT の議論を既存のコンテキストを再考しないまま導入する多くの論考に対して強い違和感を覚えてきた」(22頁)と触れられていることから明らかなように、同書著者自身のラトゥールに対する理解は相当に深く、本稿でのラトゥール理論に対する理解も、同書の内容に大きく依っていることを付け加えておきたい。
- 2) ただし、カロン自身は、ANT を科学社会学における分析手法の 1 つとして提示するにとどまり、その可能性を精査し、近代社会を批判的に考察するための方法論として育て上げたのがラトゥールであった。
- 3) より詳しくは、久保 (2019, 31-43頁) による解説を参照されたい。
- 4) その口火となったのは、アラン・ソーカルの取った次のような行為であった。ソーカルは、ポストモダン派の知的水準をテストするために、一つの実験を行った。もしある論文がそれらしい響きを持ち、編集者たちのイデオロギックな前提をくすぐるものであれば、その代表的雑誌がその論文を受理するのかどうかを試したのである。その結果として、その論文は、編集者らのフィルターを潜り抜け、現実に刊行されることとなった。そうしてソーカルは、その編集者たちが彼の論文が単なるパロディだと言うことに気付けなかったことを批判したのである (ソーカル, 1998)。また、その詳しい経緯については、1998年の『現代思想』特集号「サイエンス・ウォーズ」を参照されたい。
- 5) Gibbert et al. (2008) は、経営学における主要ジャーナル10誌、すなわち、*Academy of Management Journal*, *Administrative Science Quarterly*, *California Management Review*, *Journal of International Business Studies*, *Journal of Management Studies*, *Long Range Planning*, *Organization Science*, *Organization Studies*, *Sloan Management Review*, *Strategic Management Journal* における1995年から2000年にかけて出版された全ての論文2643本の内、彼らが以下のように定義する「ケース研究」は、159本でしかなかったことを示している。その定義は、「主に、1つかそれ以上の営利企業における、フィールドワークに基づいた結果を報告した経験的な研究であり、そこには、いかなる実験の統制や操作も含まれておらず、また、複数の情報源を利用したものである。」(p. 1469)
- 6) 経営学における定性的方法に基づく研究の動向を振り返っている Bluhm et al. (2011) は、アメリカのトップティアジャーナルに自身の研究論文を公表しようとするとき、定量的研究に比べ定性的研究が直面する壁はまだ高いという印象を述べた後、その理由を次のように記している。「定性的研究を、どのように行えばよいのか、どのように書けば良いのかに関するテンプレートはどこにもない。それにもかかわらず、定量的研究に比べ定性的研究では、査読者が受理しても良いとする基準はずっと高く設定されているように思われる。」(p. 1867)
- 7) 同誌における過去の「ベストペーパー賞」の受賞論文の特徴からも、同じような傾向が窺える。すなわち、定性的論文が受賞した割合は、ジャーナル全体の論文数に占めるその割合よりも不釣り合いに大きいことが示されている (Rynes, 2005, p. 13)。

- 8) 正確には17%であった。それ以下、「過度の理論的要求をしないこと」(10%),「バランスの取れた広範な魅力を維持し、全ての者に開かれたものとしていくこと」(8%),「方法論的な厳密さを増進すること」(6%),「より高い影響力を目指すこと。具体的には、より社会的に重要な問題に取り組むこと」(5%),「リサーチノートの数削減・削除すること」(5%)の順であった(Rynes, 2005, p.12)。
- 9) このような傾向は、その後の経営学における研究にも色濃く反映されており、例えば、同AMJの「エディターズ・フォーラム」では、2006年には、「いかにして経営学における研究論文をより興味深いものへとしていくことができるのか」という問題意識から、いくつかの方向性が示されている。彼らによれば、「私たちの研究をより興味深いものにしていくことは、重要なリサーチクエストを問いかつ方法論的な厳密さを確保することとの連携の中で、また、読者がその論文とより一層関わり合いを持つことを動機づけながら、経営学における研究の注目度や影響力を高めることが期待される。」(Bartunek et al., 2006, p.10)
- 10) 定性的研究をいかに科学的なものとするのかという論点は、社会科学における古くからあるテーマの一つであるが(例えば、Straus and Corbin, 1998 や Yin, 2003 などを参照されたい)、現在では、経営学における多様なジャーナルで、同じ論点が真剣に議論されるようになってきている。例えば、AMJ 以外では、*Journal of Management Studies* における Bluhm et al. (2011) の研究や、*Strategic Management Journal* における Gibbert et al., 2008 の研究を参照されたい。ともに、過去に掲載されてきた定性的研究を振り返り、より科学的に厳密な(ジャーナルとして受理可能な水準の)定性的研究のあり方が模索されている。
- 11) あえて「科学者としての経営学者の社会学」といった新奇なアイデアを作り出してまで取り組む必要もないだろう。彼らはすでに科学者として科学論と出会っていたのであり、ラトゥールが発していた次のような言葉を繰り返すだけで十分である。すなわち、「こうした科学者たちが私たちとの出会いから何も学ばなかったならば、あまりに残念なことであり、私たちにできることはあまりない。」(ラトゥール, 2019, 187頁)
- 12) ジェームズ・マッキンゼー (James McKinsey) は、ノースウェスタン大学のアーサー・アンダーセン (Arthur Andersen) がそうしていたように、自らもシカゴ大学ビジネススクールの自分の学生の中から新しいスタッフをリクルートしていたが、彼の死後には、ますます難しくなった (McKenna, 2010, p.206)。
- 13) その顕著な例は、1950年代の終わりから1960年代にかけて、ヨーロッパ各地に移植された、アメリカ型企業モデル(すなわち、事業部制組織)の普及に見ることができる。その際、中心的な役割を果たしたのがマッキンゼー社であり、とりわけ「マッキンゼー化」(McKinzeyed)されたのがイギリスであった (McKenna, 2010, p.182)。
- 14) 例えば、それらのケースの多くはエリート経営者の視野を特権化したものであり、そこではしばしば労働者や女性や貧困者の声が排除されており、彼らのリーダーシップを神聖化、ヒーロー化したものであると批判されてきた (McDonald, 2017)。
- 15) HBS における Podcast 上でのインタビューによる。以下、下記ウェブサイト参照されたい。
[<https://hbr.org/2009/03/rethinking-the-mba.html>] (2019.1.31 アクセス)
- 16) ある経営人類学者は、このような MBA 再考の議論を受け、ビジネススクールにおける経営人類学の必要性が今後ますます高まると予想している。つまり「経営教育におけるフィールドへの

回帰は、必然的に、これまで人類学者が格闘してきた問題へと関与することになる。そのため、その問題となっているビジネススクールの学生たちは、これまで多くの人類学入門クラスの学生たちが直面してきた同じ問題を突きつけられることになる。つまり、自分自身の文化とは異なる文化を研究するとは何を意味するのか」(Palmås, 2013, p.3) が鍵であると述べていた。しかし、ラトゥールの立場は、このような文化相対主義的発想とも異なることに留意する必要がある。上記のような文化相対主義と、多自然主義（例えば、デスコラ, 2020）との間には、明白な違いがある。

参 考 文 献

- Bansal, P. T., Smith, W. K., and Vaara, E., 2018, "From the Editors: New Ways of Seeing Through Qualitative Research", *Academy of Management Journal*, Vol. 61, No. 4, pp. 1189-95.
- Bartunek, J. M., Rynes, S. L., and Ireland, R. D., 2006, "Academy of Management Journal Editors' Forum: What Makes Management Research Interesting, and Why does it Matter?", *Academy of Management Journal*, Vol. 49, No. 1, pp. 9-15.
- Bluhm, D. J., Harman, W., Lee, T. W., and Mitchell, T. R., 2011, "Qualitative Research in Management: A Decade of Progress", *Journal of Management Studies*, Vol. 48, No. 8, pp. 1866-91.
- Callon, M., 1987, "Society in the Making: The Study of Technology as a Tool for Sociological Analysis", in Bijker, W. E., Hughes, T. P. and Pinch, T., eds., *The Social Construction of Technological Systems: New Directions in the Sociology and History of Technology*, The MIT Press, Cambridge-MA.
- Datar, S., Garvin, P. and Cullen, P., 2010, *Rethinking the MBA: Business Education at a Crossroad*, HBS Press: Boston-MA.
- Gibbert, M., Ruigrock, W., Wick, B., 2008, "Research Notes and Commentaries: What Passes as a Rigorous Case Study?", *Strategic Management Journal*, Vol. 29, pp. 1465-74.
- Latour, B. and Woolgar, S., 1979, *Laboratory Life: The Construction of Scientific Facts*, Sage, Los Angeles.
- McDonald, D., 2017, *The Golden Passport: Harvard Business School, the Limits of Capitalism, and the Moral Failure of the MBA Elite*, Harper Business, New York.
- McKenna, C. D., 2010, *The World's Newest Profession: Management Consulting in the Twentieth Century*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Palmås, K., 2013, "Rethinking the MBA: A Turn to the Field within Business Education?", *Journal of Business Anthropology*, Spring, pp. 1-4.
- Rynes, S. L., 2005, "From the Editors: Taking Stock and Looking Ahead", *The Academy of Management Journal*, Vol. 48, No. 1, pp. 9-15.
- Strauss, A. and Corbin, J., 1998, *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory*, Sage Publications: Thousand Oaks-CA.
- Vermeulen, F., 2005, "On rigor and relevance: Fostering dialectic progress in management research", *Academy of Management Journal*, Vol. 48, pp. 978-982.
- Whitehead, A. N., 1931, *Introduction: On Foresight*, in Donham, W. B., *Business Adrift*, Whittlesey House: New York, pp. xi-xxix.

Yin, R., 2003, *Case Study Research: Design and Methods*, 3rd edition, Sage Publications: Thousand Oaks -CA.

金森修（2000）『サイエンス・ウォーズ』東京大学出版会。

久保明教（2019）『ブルーノ・ラトウールの取説——アクターネットワーク論から存在様態探求へ——』月曜社。

T. クーン（1971）『科学革命の構造』中山茂訳，みすず書房。

A. ソーカル（1998）「『ソーシャル・テキスト』事件が明らかにしたこと，しなかったこと」河村一郎訳『現代思想』第26巻，第13号。

A. ソーカル=B. ブリクモン（2012）『「知」の欺瞞——ポストモダン思想における科学の濫用』田崎晴明・大野克嗣・堀茂樹訳，岩波書店。

P. デスコラ（2020）『自然と文化を越えて』小林徹訳，水声社。

B. ラトウール（2017）『法が作られているとき——近代行政裁判の人類学的考察——』堀口真司訳，水声社。

B. ラトウール（2019）『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門——』伊藤嘉高訳，法政大学出版局。